

特性概要

品種名	あきたこまちR	あきたこまち
早晩性	早	早
出穂期	早	早
成熟期	早	早
出穂期 (月日)	7月27日	7月27日
成熟期 (月日)	9月5日	9月6日
稈長 (cm)	76.8	77.1
穂長 (cm)	17.3	17.6
穂数 (本/m ²)	439	433
倒伏 (0:無~5:甚)	0.1	0.0
いもち耐病性		
葉いもち	中	中
穂いもち	やや弱	やや弱
耐倒伏性	やや弱	やや弱
耐冷性 (障害型)	中	中
高温登熟性	中	中
穂発芽性	やや難	やや難
玄米収量 (kg/a)	57.3	58.8
「あきたこまち」比 (%)	98	(100)
玄米千粒重 (g)	22.6	22.8
玄米外観品質 (1~9)	1.8	2.0
玄米粗タンパク含有率 (%)	6.6	6.5
白米アミロース含有率 (%)	16.9	17.1

- 1) 秋田県農業試験場奨励品種決定基本調査標肥区令和元~3年の平均。
- 2) 施肥: 基肥 N-P₂O₅-K₂O 各5kg/10a、追肥 (減数分裂期) N 2kg/10a
- 3) 特性は育成地 (秋田県農業試験場) における評価 (平成29年~令和2年)。
- 4) 玄米収量、玄米千粒重は篩目1.9mm、水分15%換算した値。
- 5) 玄米外観品質は (財) 日本穀物検定協会東北支部調査 1 (1等上) ~9 (3等下)
- 6) 玄米粗タンパク含有率は水分15%換算、ケルダール法で測定。
- 7) アミロース含有率は乾物換算、BLTEC社アミロースオートアナライザーで測定。

生育ステージと栽培管理

(1) 生育ステージ

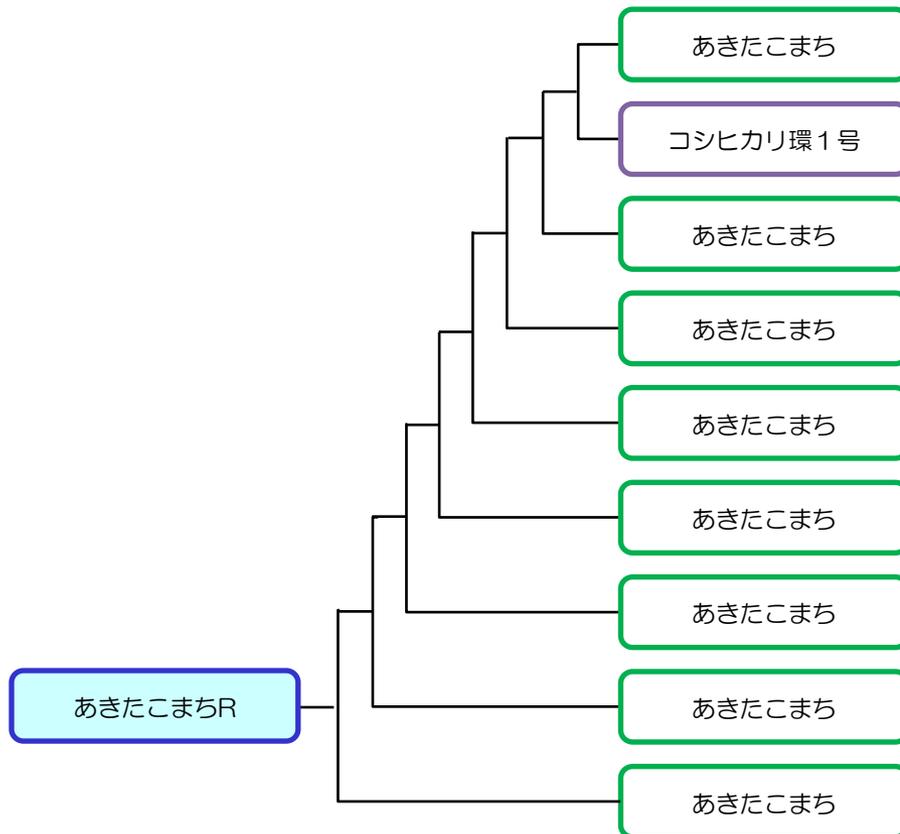
- ▶ 生育ステージは、「あきたこまち」と同じである。

(2) 栽培管理

- ▶ 土づくりは、「あきたこまち」と同様に重視し、特に砂質土水田や「秋落ち」が認められる水田では地力の底上げを図る。砂質で、かつ「秋落ち」する水田では、マンガン質肥料を施用する。
- ▶ 施肥、田植え、水管理は「あきたこまち」と同様に行う。
- ▶ カドミウム吸収抑制のための出穂前後各3週間の湛水管理は必要ない。
- ▶ 病虫害防除は、「あきたこまち」と同様に行う。
- ▶ 過去にごま葉枯病が発生した水田、砂質で、かつ「秋落ち」する水田では、薬剤防除を確実に実施する。

※「秋落ち」とは、初期生育や栄養生長時の生育が順調であっても、幼穂形成期や穂ばらみ期以降、生育が凋落し、収量が上がらない現象。

系譜



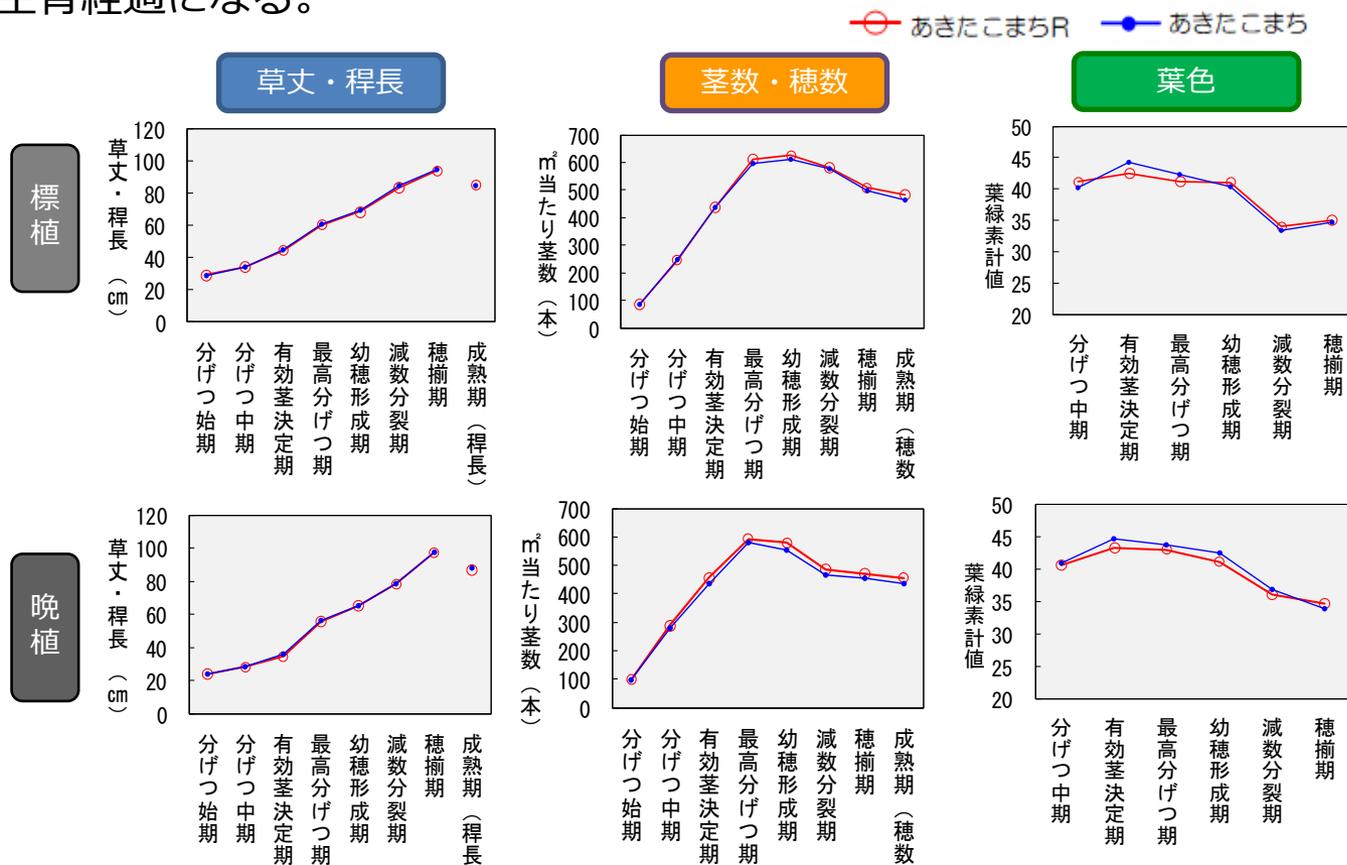
▶ 「あきたこまち」を母、「lcd-kmt2」（コシヒカリ環1号）を父として人工交配後、「あきたこまち」と7回繰り返し人工交配（戻し交配）し、育成した。

▶ 「コシヒカリ環1号」が持つカドミウム低吸収性遺伝子を受け継ぐ品種である。

▶ 「あきたこまち」を7回戻し交配したことにより、遺伝的背景は理論上、「あきたこまち」と99.6%以上同じである。

生育特性

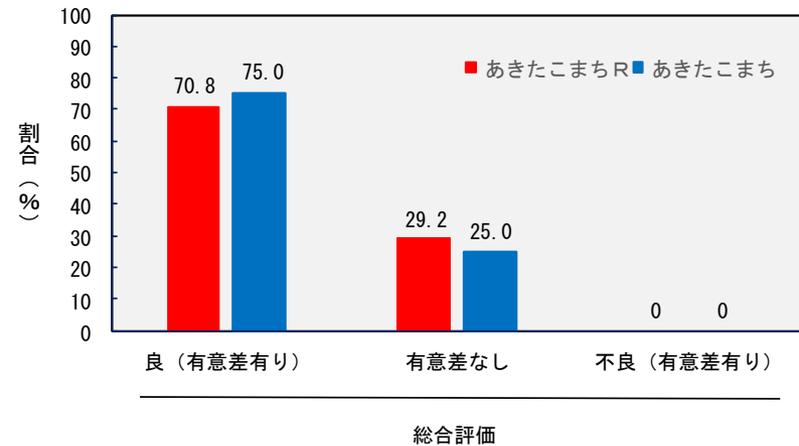
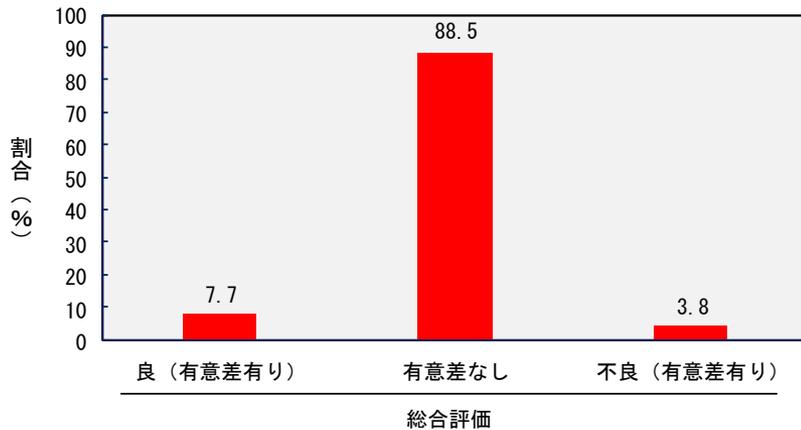
▶ 草丈と稈長は、「あきたこまち」と同じで、茎数と葉色は栽培年次、ほ場によって「あきたこまち」とわずかに差が見える場合もあるが、概ね同じ生育経過になる。



1) 標準植：令和3年（5/17移植）、4年（5/16移植）および5年（5/16移植）の平均値。晩植：令和3年、4年および5年（5/25移植）の平均値。 2) 基肥：7 kg/10a (N、P₂O₅、K₂Oの3成分共通)。追肥：減数分裂期に窒素で2 kg/10a。 3) 栽植様式：条間30cm、栽植密度 20.7株/m²、4本植え、6条移植機で移植

食味

▶ 食味は、「あきたこまち」と同等である。



- 1) 「あきたこまち」を基準とした食味官能試験結果
- 2) 令和元～4年産の同一産地「あきたこまち」を基準とした。
- 3) 場内食味試験、n=26

- 1) 「コシヒカリ」を基準とした食味官能試験結果の比較
- 2) 令和3、4年産の複数産地コシヒカリを基準とした。
- 3) 外部委託試験、n=24

玄米のカドミウム濃度と 茎葉のマンガン濃度

- ▶ 玄米のカドミウム濃度は、「あきたこまち」に比べ顕著に低くなる。
- ▶ マンガン吸収能力が低く、ごま葉枯病が発生しやすい傾向がある。



ごま葉枯病の葉の病斑



いもち病の葉の病斑

栽培上の留意点

- ▶ 間断灌水で穂ばらみ期以降の根の活力を維持する。
- ▶ 過去にごま葉枯病が発生した水田では、薬剤防除を必ず行う。
- ▶ 砂質で、かつ「秋落ち」する水田では、ごま葉枯病に罹病しやすくなるため、マンガン質肥料を施用するとともに、薬剤防除を行う。
- ▶ マンガン質肥料を施用することにより、ごま葉枯病を軽減できる。軽減効果はマンガン質肥料の施用量に応じて高くなり、その効果は少なくとも3年持続する。
- ▶ 通常、ケイ酸質肥料を施用しているほ場では、ケイ酸質肥料に替えてマンガン質肥料を施用する。
- ▶ 薬剤防除は、育苗箱施用を行っている場合は、ブーンパディート箱粒剤（いもち病、初期害虫と同時防除）、ブーンレパード箱粒剤（いもち病、紋枯病、初期害虫と同時防除）などを箱当たり50 g 施用する。